

# リオ大会時における多言語対応の概要①

リオ2016大会  
Rio2016

東京2020大会  
Tokyo2020

## 大会施設内の多言語対応

会場やその周辺には大会運営のために作られた仮設の案内表示が多く設置されていました。基本的に緑色の下地に白色の情報で統一し、ポルトガル語・英語+ピクトグラムでの対応をしていました(選手村では一部、フランス語表記あり)。ピクトは誰もが分かりやすい情報伝達手段であるため、多く活用されていました。スタッフも大勢配置されていました。英語を話せるスタッフは多くはいませんでしたが、「I can speak English」という目印をつけていました。中には、スマートフォンの翻訳アプリで対応するスタッフもいました。



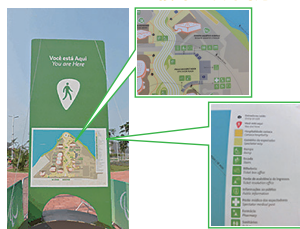
指さしの手袋とプラカード着用のスタッフによる直接的な案内対応。



最もシンプルな表示例(ポ・英+ピクト)。英語は斜体で表示。



大きな4面のパネルにより自立し、ランドマークとしても機能していた。



現在地から目的地までの行き方・距離・時間分かるマップ。



食材に関する表示。アレルギーのアレルゲンに関するピクト表示が分かりやすい(選手村)。



分別の表示がポ・英・仏+ピクトで表示されたゴミ箱(選手村)。

## ラストマイルの多言語対応

ラストマイルとは、大会会場から最寄駅までの動線をいいます。多くのスタッフや警備員が配置され、リオ市設置の観光案内所もありました。時折、小さなイベントも開かれていました。



オリンピックパーク前に発着するアクセシブルバスの表示。



拡声器で案内するスタッフ(基本的にポルトガル語)及び警備員。



観光案内所(仮設)では、交通情報マップの提供や一部英語対応していた。

## ターミナル駅の多言語対応

駅には、既存の案内表示(ポ・英+ピクト)に加えて、仮設の大会案内表示(各会場までの路線案内等)が設置されていました。大会開催期間中、スタッフも多く配置されていました。



各会場までの路線案内。情報をシンプルに表示しているため分かりやすい。



既存の案内表示。新設の駅であることもあり、視認性が高い。



特に車いす利用者へのルート案内として地面への表示も目立っていた。

## 道路における多言語対応

道路には、大会の全体的なシティ装飾(ルック)に合わせた案内表示も設置されていました(ポ・英)。大会に合わせて整備されたBRT専用路線をピクトで大きく注意していました。



交通車両向けの表示。シティ装飾と共に雰囲気を作っていた。



BRT (Bus Rapid Transit System=バス高速輸送システム)の路線表示。



横断歩道用の信号機。日本と同じ配色。手で「止まれ」の形を示していた。

## 歩道における多言語対応

歩道は、主に住民や観光客用に設置された既存案内表示(ポ・英+ピクト)がメインで、主要なポイントに仮設の大会案内表示が設置され、共存していました。



(右の既存案内表示)目的地まで徒歩でかかる時間を示して分かりやすい。



観光地においてもポルトガル語表示のみの場合もあった。



観光地では、周辺マップが適度に設置されていた。



ライブサイトや聖火台会場を示す大会案内表示。